
君がいない

啓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君がいない

【ZPDF】

Z0938D

【作者名】

啓

【あらすじ】

彼は彼女がいなくなる事により、彼女が何を思っていたのかを知る

朝、いつもと同じように学校に行くが、そこに君はいなかつた。いつもなら、僕が来るまでにいて元気よく

「おはよう。」

と言つてくれていた君が、今そこにはいない。そう、君はこの日を境に僕の目の前から消えた。

僕は、いつものように起きて学校に行く準備をしていたが、この日は珍しく学校に行きたくなかった。なぜかはわからなかつたが、何か嫌な予感がしていた。僕は、それでも休んではいけないと想い、いつもと同じ時間に学校に向かつた。

学校に近づくにつれ、嫌な感じがましていくが、僕は気にせず学校の校門を入り教室に向かつた。教室の前まで行き、ドアを開けようとした。

そのときだ。僕の中にあつた嫌な感じが、破裂したかのように無くなつた。僕は不思議に思いながらドアを開けた。

そこは、いつものように騒がしく、僕を見てみんなは

「おはよう」と声をかけてくれたが、いつもいるはずの君が今日はないなかつた。僕は、不思議に思つたが、たまにはこんな事もあるのだろうと思い、あまり気にしなかつた。

でも、もうすぐ学校が始まるというのに君は来ない。さすがの僕も心配になつてきた。そして、君が来るよりも先に先生が来て、みんなが席に着くが、やっぱり君は来ないまま。

今日は、休みなのかと僕は思った。だが、君は僕と同じで一度も学校を休んだ事がなかつた。

そして、君が来ないまま授業は始まつた。一時間・一時間・三時間と過ぎても君は来なかつた。

昼休みになり、弁当箱を取り出す人、食堂に食べに行く人と分かれいた。

いつもなら、君と僕は庭の方へ出て、一緒に御飯を仲良く食べているはずが、今は僕、一人で御飯を食べている。

今日は、もう学校に来ないのだろうか？僕は先生に聞くが、先生は「知らない」と言つ。だが、僕には先生が嘘をついているように思えた。先生は、何かを隠しているに違いないと僕は考えたが、根拠がなかつた。

でも、君が連絡もせずに休むような人間には思えなかつた。だから、僕は何度も何度も、先生に君の来ない理由を聞いたが、先生の答えは常に一緒に

「知らない」の一言だつた。

僕は、他の友達にも聞くが、君が来ない理由はわからなかつた。昼休みが終わり、授業が始まつても、君は来ないまま。

今日、朝の事を僕は思いだした。あの嫌な感じは、この事だつたのだろうかと・・・。僕は急に不安に包まれた。

君の身に何かが起きたのではないか、何かの事件に巻き込まれたのではないかと考えた。

それなら、先生が知らない理由も納得出来るのだが・・・。

でも、よく考えたら。その場合は、家族の人方が学校に連絡してくれるはずだ。

僕は、君が来ない理由を学校が終わるまで、ずっと考えていたが、結局わからなかつた。

君の家に、直接行けたらよかつたのだけど、部活が忙しいので今日は諦めて、明日は学校に来ていいなと思い僕は眠つた。

次の日、いつものように準備をして学校に向かつた。

今日は、君が来ているかを考えながら、学校に向かい、校門を入り教室のドアを開けた。

僕は、ドアを開けてから教室を見渡したが、君は今日もいなかつた。

そして、君よりも先に先生が来た。僕は、先生の顔を見て驚いた。いつもとは違う顔つきで、少し先生の表情は暗かつた。

先生は、教卓の前に着くとクラスを見渡し、話し始めた。

僕は先生の話をして聞いてびっくりした！まさか君が・・・。

僕は、先生が話を終わり教室から出て行つた後を追い、もう一度君の事を聞いたが、答えは同じだつた。「あの子は昨日、急に引っ越ししたんだよ。」先生は、そう言い僕の前を歩いて行つた。僕は、頭の中が真っ白になり、今日の授業には集中できず、学校が終わるなり走つて君の家に向かつた。

こんな時に、部活などしていられないからだ。例え部活に出ても、集中してできないから、怪我をするかも知れないと思い休んだ。やつとの思いで、君の家に着いたが、すでに人の気配はしなかつた。確かに君は、引っ越しをしたんだと思つたが、僕は君とよく行つた二人の秘密の場所に向かつた。

君とよく、夜に出かけたあの場所へ、ゆっくりとした空間で一人、星を眺めながら話をした二人だけの場所へ。

その場所に、行つてもやつぱり君はいなかつた。

だが、そこにあるベンチの上に、手紙のよつなものが置いてあつた。僕は、その紙を広げて読んでみた。

（あなたが、この手紙を読む頃には、私はこの町にはいないと思ひます。

本当は、あなたに言つてから行こうと思つたのだけど、言つと辛くなるので、言わずに行くことにします。

きっと学校では、引っ越しをしたとしか言つていないと思つただけで、本当は違うの。

私の体が弱いのは知つているよね。

私、自分の病気を治すために、アメリカに行くことにしたの。

だけど、必ず成功するとは限らないから、あなたには内緒で行こうと思つたの。

確率は五分五分だから、あなたは必ず反対すると思つた。

もし、あなたに止められたら私・・・。

絶対に行けなくなってしまうから、私は病気を治したい。だから、

「めんなさい。勝手かもしれないけど、アメリカに行つて来ます。もし、よければなんだけど、私が帰つて来るまで待つてくれるかな？もし、成功したら一ヶ月ぐらいで帰れると思うんだ。帰つて来られたら、必ずここに来るから。それじゃあね。また、会えたらいいな。」

手紙はここで終わっていた。僕は、君の事を考へていなかつた。君がいない間、寂しくなるけど僕は君が帰つて来るまでずっとここで待つよ。

毎日ここに来て、君の無事を祈るよ。

彼と彼女がその後、会えたかどうかはわからないが、こんなに思ひあつてゐる二人を離すことなど出来るのだろうか？私は、決して出来ないと思う。

もし、一人が会つことが出来なければ、私はこの世に神様などがいるはずがないと、思つてしまつだらう。もし、神様がいるとすれば、この一人が必ず会えるはずだ。

私が神様なら、必ずそうするだらう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0938d/>

君がいない

2010年12月18日16時08分発行